

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第三十二卷「社会科学（一の二）」

各国および日本の国情（系譜、家史、民族、人口、世代、性別、格差、統計）

編纂、監修

岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第三十二巻を成し、岩崎の言語の著作のうち、各国および日本の国情に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 〇歳～十九歳

第二編 二十歳～二十九歳

第一部 高齢化社会、自殺社会、「男女平等」の幻想、女性どうしの心理格差など

(編集)

皇族における男子出生急減と皇籍離脱

皇族、旧華族における男子出生急減と一夫一妻制

皇族、旧華族における男子出生急減と遺伝学

第三編 三十歳～三十九歳

第一部 日本人の苗字、旧派歌道・歌学についての情報更新

第二部 岡山県巫女特別協力資料(三)

『吉備巫女神道・ヤマト皇統相関系図』

・吉備の女系女子の王家とヤマトの男系男子の王家
(天皇家)との交錯の図示

旧吉備王国(郷里岡山県および兵庫県、広島県、山口県など山陽地方)系巫女神道・巫女歌道 令和新時

代 最終協力版

第四編 四十歳～四十九歳

第五編 五十歳～五十九歳

第六編 六十歳～六十九歳

第七編 七十歳以降

第八編 著作者の一部および著作権者が岩崎純一であるもの

第九編 著作権者が岩崎純一であるもの

第二編 二十歳〜二十九歳

第一部 高齢化社会、自殺社会、「男女平等」の幻想、女性どう

しの心理格差など

二〇一一年十二月十六日 起筆、攔筆、公開

■高齢化社会

先日、都営三田線に乗っていたら、水道橋駅から乗ってきた一人の高齢女性が、閉まりかけのドアにぶつかりながら、「この電車は水道橋まで行きますか？」と大声を出した。

ドアの開閉が繰り返される中、危険にもドアをこじ開けるようにして何とか乗り込んだこの女性だったが、周りは一瞬啞然とした。しかし、女性の近くにいた別の女性が「今あなたが乗ったのが水道橋ですが」と繰り返し教えたところ、女性はやっとなげいて大笑いし、「春日まで行きますか？」と問い直し、春日は水道橋の次の駅であるので、二人の笑いの冷めないまま春日に着き、訪ねた高齢女性は急いで降りて行った。

私は、高齢化社会とはこういうことであると考えている。将来、高齢者の（悪気はないが極めて危険な）ボケ発言・ボケ行動一つが

公共交通機関を遅延・麻痺させるようなことがあった時に、我々国民がそれにピリピリせず、機転を利かせて迅速な危険回避行動をとり、なおかつ直後には冷静に笑って済ませられるかどうか、それを数十年単位で持続させることができるかどうか、それが、少子高齢化社会を日本が乗り越えられるかどうかの鍵であると思う。

駅の狭い階段で私の前を高齢者が横並びに歩いていて、速足の私が追い越そうにも追い越せずにじれったく思うとき、私はいつも、「世界一になる理由は何があるんでしょうか？ 二位じゃダメなんでしょうか？」という発言を思い出す。

「塵も積もれば山となる」と言う。増加する高齢者のマス（mass・集団）としての振る舞いを社会的に分析すれば、電車を遅らせた若者の足取りにフタをするその一つ一つの動きの総和が、日本の経済の悪化、科学技術発展の低迷、経済力としての国益の減退を日本にもたらしていくだろう。

我々若者は、高齢者の面倒を見るために、趣味・旅行・恋愛などに時間をとっている場合ではなくなっていく。

それを、「どこかの知らないおばあちゃんのせいで電車が遅れ、数千人に影響が出ました。GDPも中国に抜かれました。今日も前のおばあちゃんに引っかけたって速く歩かせませんでした。これが日本の少子高齢化社会あつぱればボケギャグです」と落語風に大笑いしながら世界に向かって発信する気が我々にあるのか、それとも、いつもいつも高齢者と若者、親と子供、男と女、首都圏と地方、都市と田舎

どうしがピリピリ敵対しながら日本社会をやっていくのか、それによつて日本の未来が全く違うものになってくる。

■自殺者数、今年も三万人超える見込み

今年の締めくくりとして、震災関連の報道がメディアで繰り返り広げられているのは悪くないが、もっと重要だと思ふことを、あえて取り上げておこうと思ふ。

計算上は、今年の大晦日までにあと千三百人が自殺する見込みであるから、すでに今年の内殺者が三万人を超えているのは確実と思われる。表に出ないだけで、本当は毎年十万人くらいは自殺しているようである。

もつとも、「今年はまだ自殺者は出ないに違いない」と言いたいところだが、残念ながら「あと千三百人」という予想は当たるとは思ふ。「今年には震災があつて特別な一年だった」と言う気持ちも分かるものの、テレビの端に「現在の自殺者数」のテロップを一緒に流せばよいのに、とも思ふ日々である。

ちなみに、女性では、曜日ごとの自殺率の差はほぼ無視できる小ささである一方で、男性では、月曜日の自殺率が土日・祝日・年末年始のそれの一・五倍であることを考えれば、今年の終わりまでに、月曜日が二回であるのに対して、土曜日が三回あつて、祝日もあり、年末年始もあるところが、せめてもの救いだらうか。もちろん、そ

んなことは今回の記事の重点ではないが。

おそらく自殺の原因のほぼ全てが「人生全般の悲哀と不安感」や『曾根崎心中』的なるもの」であつた近世。そして、西洋化・近代化の波に乗り始めても、自殺の原因は、相変わらずしばらくは金的・経済的なものではなく、人生をただ「不可解」と書き残した藤村操の『巖頭之感』的なるもの」であつた明治・大正時代。そして、戦争遂行というただ一つの目的に向かう圧倒的・盲目的充実感から自殺率が激減した昭和戦前。

対して現在では、藤村操のような死に方、そして、⁵⁰年前に神社で自殺した哲学者須原一秀のような「人生の哲学的プロジェクトとしての自死」のような死に方は、どちらかと言うと「弱い男」がやることだと、そう思われるようになったのではなからうか。あるいは、理解されにくくもなつたと思ふ。

最近では、社会的地位のある女性社会学者やフェミニストたちから、「男性の過労死はやる気や自己管理能力のなさの表れだ」と非難されるようにもなつた。

■自殺率の男女格差

さて、日本の自殺者数は、明治三十年時点でおよそ六千人、昭和十一年時点でおよそ一万五千五百人、この二者間の「自殺者数の増加」の主要因は、単に「総人口の増加」である。

自殺は悲しいが、もし「総人口の増減に沿って自殺率が綺麗に増減している理想の自殺率社会」なる概念があるとすれば、私個人としては、今でも戦前の日本にそれを見出し出しているし、一つの憧憬を持つている。その根拠として譲れないと思っっているのが、「男女で自殺率に差がないこと」と「自殺率の増減が総人口の増減に寄り添っていること」である。

男女で自殺率に圧倒的な差がついたり、自殺率の上昇速度が総人口の増加速度をかなり上回ったりしたら、その社会と時代は文字通りどこかが「歪んでいる」と考えるのが、最も人として客観的・知的な態度ではなからうか。

戦後、女性の自殺者数は、昭和二十年のおよそ七千人から最近のおよそ八千八百人まで、およそ二千人の増加。その増加の主要因は、総人口の増加である。総人口の増加速度に比べて自殺率の伸びが小さく、むしろ戦前よりも自殺の低迷傾向を示している。

上と同じ期間において、女性人口十万人あたりで換算すると、自殺死亡者は十八から十三・五へと低下しており、事実上、女性の自殺は減少傾向にある。戦後、女性の自殺率の最高地点は昭和三十年で、女性十万人あたり二十人。

戦後、男性の自殺者数は、昭和二十年のおよそ九千八百人から最近のおよそ二万四千人まで、およそ一万五千人の増加。戦後の男性の自殺率の最高地点はまさに現在で、毎年更新を続けている。

男性の自殺増加の要因には、色々な説があるが、私自身が要因だと思ふものを挙げておこうと思う。（それぞれが互いに因果関係にあ

る項目もある。）

◆ 経済社会的要因

- 過労自殺
 - 景気の低迷
 - 貧富格差の増大
 - 非正規雇用の若年男性による絶望
 - 非正規雇用の高年男性による絶望
- など

◆ 健康不安

- 病気になったことから来る絶望
- 老いへの不安

◆ 戦後日本人男性特有の心理的要因

- 女性の社会進出
- 社会進出した女性に対する「言い返せなさ」
- 社会進出していない女性がなお結婚相手に求める高い経済力
- 恋人や妻に対する「言い返せなさ」
- 自分の両親への申し訳なさ
- 結婚相手である女性の両親への申し訳なさ
- 高度成長期を体験し、妻一人・子供二人というオーソドックスな家庭を持った世代の男性の、高齢化・リタイアに伴う燃え尽き

● 恋人や配偶者からの三高（高学歴・高収入・高身長）などの実
利的・外見的要求への「応えられなさ」

※ 私が関心を持っているのは、「女性に対する日本男性的な本音
（ホンネ）」と建前（タテマエ）との解離」の問題である。

戦前までの日本人全体（男女とも）及び現在の日本人女性におい
ては、経済格差の増大が自殺率の増加を引き起こしておらず、一方
で欧米では経済格差がすぐに男女の自殺率と相関関係を帯びること
から、本来は、とりわけ日本人が自殺に至るためには、「（1）格差
社会であること」に加えて、「（2）その格差社会で仕方なく低中所得者層に位置した若年男性やリタイアした高齢者男性を焦燥と劣等
感に至らしめる、（誰が言ったのでもないが、「社会全体」や「総体
としての女性性」が加害者であるような）あざ笑い・あおり・けな
し・嫌がらせ」が存在することが必要条件と思われる。

しかも、欧米では女性が社会進出しても男性の自殺率が上がらな
いのが普通だが、女性が社会進出すると男性の自殺率が上がる唯一
の先進国が日本だと言える。

ということとは、「日本においては、（1）の解決を後回しにしてで
も（2）だけは前近代的日本観に心理的基盤を置く社会を再び作り
上げることが男性の自殺率低下に一定の効力を持ちうる」、すなわち
「景気回復・雇用創出よりももっと大切なことがある」というのが
私の考えである。

◆ 生物学的要因

● 新生児に女兒よりも男児が多く、結婚できない男性が相対的に
増えた。（戦後の食生活の欧米化・食糧自給率の低下による、分子レ
ベルでの何らかの生物学的・遺伝子的不均衡が原因だと思われるが、
詳細は不明。逆に、皇室・旧公家・旧華族など、近親婚を繰り返し
てきた家系では、男児が一人も生まれず、養子を迎えるか男系断絶
のため廃絶する家系が増えている。）

◆ 人口の実数上の要因

● 男性の総人口の増加

こうして自殺という観点だけを取り出せば、戦後日本社会は、様々
な要素が男性に対して負荷をかけるような偏向した構造になってい
るのは確かなのだと思う。

逆に言うと、自殺率が変わらないか、むしろ低下している現在の
日本人女性に関しては、現在の自殺要因を分析すれば、それがあ
る程度そのまま戦前までの日本人女性の自殺の要因に等しいと仮定
することができるのだろう。そして、そのほとんどは、人生全般の
悲哀や失恋の悲哀、家庭内暴力などであるだろう。

■ 「男女平等」は幻想

しかし、実際のところは、「男女平等」という、近現代民主主義的に一見正当な看板を掲げてきた昨今の日本において生じた女性の笑顔は、極めて短期的な笑顔であると思っておいたほうがよいと私は思う。

それは、政府によって、学歴・社会的地位のある女性によって、あるいは一般女性・主婦自身の短期的な流行によって、捏造・扇動された、非常に無機的な女性の笑顔であると言って過言ではないと思う。

女性の社会進出が進んでも、なお女性には永遠の課題が残されている。妊娠・出産・子育ての問題である。しかし、それも一筋縄ではいきそうもない。

興味深いことに、「私は仕事が優先で、結婚も考えておらず、子供も特に欲しいとは思わず、結婚・妊娠・出産が女性の人生において大して重要とは思っていない」と言う女性もいれば、「どうせ私など結婚できないし、子供も産めないだろうから、諦めた」と言う女性もいる。

特に前者の女性の中には、かえって男性からの支えを嫌悪したり、それを「女性の自立心・人権の無視」であると考えたりする女性も多くなってきた。

ただし、自分が社会進出したことに満足している女性と、結婚・出産を二十代から諦めたような女性との心理構造は、「近代的自我」を自力で運用している点では原理的におそらく同じもので、そのよ

うな女性は、人生の茫漠とした前近代的・動物的悲哀によって自殺することはほとんどないようである。現在の女性の自殺者数を構成しているのは、おそらくこのような女性たちではない。

一方で、「私には小さいころから結婚願望もあるし、子供も産んでみたいし、自分にできることであれば、仕事でも趣味でも頑張っていきたい。それなのに、経済的理由や家庭上の理由で実現できていない」という女性の場合には、やはり我々男性がもっと積極的に目を向けて、支えていくべき余地があると思う。

■女性内部の心理格差・水面下での抗争

ところが、そういう女性の夢を「少女のような理想ばかりで、大人の女の現実を見ていない」と非難しているのは、どちらかと言うと、我々男性よりも、社会進出した女性・既婚者の女性・子供のいる女性であるように思う。

政府は、おそらく、そういうことがあまり分かっていないのではないかという気がする。男の悩みと女の悩みの動物的・根源的な差異というものを、戦後の日本は軽視してきたように思う。

「今のところは男女の自殺率に圧倒的な差があること」、「同じ女性においても、社会的に成功したために自分が結婚・妊娠・出産を経験していないことを気にしなくなった女性や、うまく高所得男性の家庭に収まり専業主婦となった女性と、延々と先のような苦悩を繰

り返して三十代・四十代になった女性とに、陰で分かれていること」、従って、「もう少し時が経てば、今度は女性どうしの様々な格差が表沙汰となる社会が到来して、女性の自殺率が上昇する可能性があること」。

■医学の発展がもたらす皮肉な「脅し」

ところが、医学だけはどんどん発展していくために、「三十代後半になると、卵子の遺伝子が壊れてきて、ダウン症児や自閉症児を産む確率が一気に上がる」などという最新の医学的事実に基づく「脅し」だけはネットなどでばらまかれている現実がある。

しかし、内容が事実であるというところに、女性の大変な苦悩があると思う。最近では、胎児に染色体異常があるかどうかが出生前検査で分かるようになってきている。

結局、若いうちに結婚して子供を産んで仕事もできる女が「偉い」などという構図ができる。「理想の男性を求めて結婚・出産を遅らせるなどは、障害児の気持ちの分からない女がやることだ」などという歪んだ言論まで出てきてしまう。このような議論は、ネットであるのが現実世界であろうが、すでに多く展開されている。

それで、なおさら三十代・四十代の未婚女性は焦ることになる。そのような女性にとって、「結婚したい、子供も欲しい、というささやかな夢があること」も、「高齢出産では障害児を産む確率が上がる

こと」も、とりあえず事実であるのなら、そのような女性の心理を楽にする解決方法は一つしかないと思う。

私はこういうところでは、がさつで大雑把な人間なのだと思うが、「子供を産んでいない女性であっても、立派な女性は立派な女性である」ということを、勇気のある既婚・未婚の男性が言って回るしかない、と思うのである。

あるいは、「女性がダウン症や自閉症の子供を、人工妊娠中絶を選ばずに産んだところで、その女性に真の愛がある限り、責任はない」ということを、女性の代わりに、それを堂々と言える勇気のある男性が言って歩くこと、それしかないと思う。

しかし、むしろ「障害であるダウン症や発達障害・自閉症を早期に発見してあげることが子供のためである」という考え方が、専門家にも母親にも広く共有されている昨今、私が今述べていることがそれほど多い意見ではないということも、自分では重々分かっているつもりである。

■現在の日本Ⅱ「事実上の一夫一婦制と一夫多妻制の二重採用社会」

さて、男女の生涯結婚率・離婚率の格差は、男女の恋愛格差を如実に表していると思う。女性は、厚労省などの統計からも分かるように、一度離婚すると二度と結婚しない確率が、男性よりも高い。現在の日本は、少数の学歴・経済力のある男性に複数の女性が集ま

っている「事実上の一夫多妻社会」であるとも言える。

同時期に複数の女性を恋人・妻とするのは「浮気」「不倫」「不貞」「重婚」などで、非常識や違法ということになるが、一生涯の別々の時期に複数の女性を妻とするのは合法である。

実はこれが、戦後日本人がイスラム教の一夫多妻制を女性蔑視の野蛮な文化と見下してアメリカ的民主主義を信じた愚かさ、ひいては戦前の自国の公家・武家・農村の一夫多妻制に比べて今の我々は近代的・倫理的であると勘違いした頑固さに、つながっているのではないかと思う。

先ほども書いたように、「子供を産むことよりも仕事が優先で、実際に子供を産んでおらず、満足している女性」の場合には、我々男性が支援する必要はないどころか、迷惑がられたり、お節介としてはじき返されることさえある、かなり興味深い時代になった。一方で、周りの既婚女性に何と言われようが、「理想の男性を探し続ける」という「少女の頃の夢」を持ち続ける女性が今も少なくないとして、そのどこがおかしいのだろうか。

厚生労働省や民間団体が巷の女性に対して調査を行うと、学歴順・経済力順に男性を序列化する結果が出るにもかかわらず、男性が奮起しようかつに女性を養おうとしようものなら、しばしば「女性の自立心・人権への蔑視」と言われるケースも増えているために、男性は「黙して何もしない」態度を選ぶようになったように思う。これは男性個々人の結婚観とは別ではあるけれども、我々男性全体としては、そういう態度を選ぶようになっていっているようである。

こうして、最終的にひずみをかぶるのは、「非正規雇用の男性」と、先に挙げた「どんな男性でもいいというわけにはいかない性格などで結婚を遅らせているが、そのためにかえって妊娠・出産の適齢期を逃しつつある女性」なのだろう。

「結婚したい。子供を産んでみたい」という夢を持っている、ただそれだけでも十分に「いい女性」である、と判断する姿勢があってもよいのではないだろうか。結果としてそれらが叶わなくとも、「それでもあなたはいいい女性である」と言うだけの器量がなければ、時代の本質を客観的・知的に見抜いている人間であるとは言えないと、私はそう考えている。

かえって、目立った社会進出・結婚・出産経験がなくとも、そのような女性たちが浮かばれる時代が来ると、嘘でも信じたというのが、私の本音である。

■データ出典

厚生労働省 統計情報・白書

http://www.mhlw.go.jp/toukei_hakusho/toukei/

警察庁 統計

<http://www.npa.go.jp/toukei/index.htm>

第三編 三十歳～三十九歳

第一部 日本人の苗字、旧派歌道・歌学についての情報更新

二〇一四年一月十一日 起筆、擱筆、公開

先日、旧派歌道・歌学の流派の総覧の宮家のページについて、和歌仲間から新たな情報を頂きましたので、更新しておきました。

旧東伏見宮家の流れを汲む天台宗青蓮院前門主、東伏見慈洽氏が元日に遷化されたとのこと。この方は歌道家ではないので、直接は関係ありませんが、血統・家柄の栄枯盛衰には直結することですので、重要な事実と思い、掲載しました。

（皆さん、情報収集能力が高いですね。）

「旧派歌道・歌学の流派・家元・団体の総覧」

http://iwasakijunichi.net/ronbun_ippan/kado.htm

（二〇一八年七月九日に追記・現在は『全集』に収録。）

それにしても、旧宮家・旧華族・旧貴族の家柄は、家名（苗字）を見るだけですぐにそうと分かりますね。臣籍降下した際にこういった方々が名乗った家名を丸暗記している華族・貴族マニアの人のほうがそうと気づきやすいかもしれません、それぞれが唯一無二のいかにも高貴そうな家名なので、割と分かりやすいです。

本来は、家名にはおおまかに分けて二つあって（「苗字」と「姓」、

これらは別物ですが、現代では同じことなので、ここでは説明は省略するとしましょう。（強引ですみません。）

ところで、[EJL](#) ニュースに日本の苗字トップ100が載っていたので、記事の下方に転載してみます。「岩崎」は、誰が調べても、いつも八十〜百位前後に登場しますね。今回も九十位です。何しろ、日本人の苗字は国勢調査ではきちんと調べないし、なおかつ戸籍・住民登録が不明の人なんていくらでもおり、アメリカに次いで世界で二番目に苗字の数が多いこの国において、大学・民間の調査で誤差が二十位程度というのは、ものすごく高い精度なのです。

出典が論文ではなくて『週刊ポスト』だし、（失礼な言い方かもしれませんが）学術的に正確な調査をおこなったとは思えないようなおかしな順位の箇所もありますが、大体はこんなものだと思います。私の出身の岡山県では、実は「岩崎」は多くはないのですが、「藤原」が極めて多いことは地元では有名ですね。藤原氏の子孫が多いと言われているし、藤原氏にまつわる一部の話は本当なのですが、（例えば、「恐い」を意味する「きよーてー」という岡山弁は、『源氏物語』の時代の京都の「けうとし」の訛りで、藤原氏の末裔が直接岡山に持ってきた言葉ですが）現在まで残っている逸話のうち全部が全部は史実ではないと思います。

「佐藤」「伊藤」「加藤」「斎藤（斎藤・齋藤・齊藤など別表記多し）」「後藤」「近藤」「遠藤」「安藤」「工藤」「江藤」「衛藤」「新藤」などは、本来は「藤原氏の末裔・傍流のうちの、どのような人々か」を家業・職掌や居住地により名乗ったものと言われていますね。だか

ら、藤原氏とは関係がある可能性はありますが、藤原氏に憧れて勝手に名乗った家もあったでしょうし、今では「藤原」姓人口のほとんどが藤原氏の遠い傍流か、藤原氏以外の系統でしょうね。残念……。この世をばわが世とぞ思ふ望月の欠けたることもなしと思へなくて残念ですね……。

逆に、日本人のほとんどが藤原氏だという説もありますね。しかし、こんなことは当たり前で、過去をどんどん遡れば、どこかで藤原氏の血が入っているなんてことは普通にあり得るわけです。いわば、「正しいが、意味のない笑い話」です。

他に岡山県で多い苗字には、「江見」「大森」「井上」「池田」などがありますね。「花房」も多く、初代岡山市長も「花房（名は端連）」ですが、現在では「はなぶさ」ではなく「はなふさ」を名乗る家も多いです。

ところで、この歌道流派の総覧の作成にご協力いただいている江波戸様は、歌人江波戸胤信の流れを汲む歌道の家柄で、他のご協力者の青柳家・北川家・一条家なども、本流ではないものの、秘かに歌道を中心とする家業・家宝を守ってきている家柄ですが、今では、各敷地内にどんな歌集・家宝が眠っているか分からない蔵があるだけだそうです。

「江波戸（かつては恵葉戸とも書いた）」という苗字を検索してみると、江波戸昭や江波戸哲夫などの学者・文化人がいたり、江波戸ミロという元女優さんがいたりで、そんなに珍しくはないようですが、「どこかでつながっている遠い親戚」と言えるくらいの少数派では

あるのでしょうか。

国民に圧倒的に有名な冷泉家の陰に隠れて、実はこんな細々とした歌道家が昭和末期までは色々あったのです。日本人が（というより、戦後日本を営んできた今の高齢者たちが）捨ててきた（捨てるを得なかった？）文化の一つの末路として、皮肉にも興味深いものです。

私も普段、世界に一冊しかない可能性がある書物を扱う機会がありますが、何しろ需要がなければ誰も目を向けようとしないうけなので、あとは朽ちてゆくのを待つだけという傾向は、日本の古典の世界でも顕著だろうなと思います。（複製しようにも、複製の最中の事故を恐れ、書庫に温めておくだけ、というケースも多いので、歌道家においても、そういう選択をしている家があるはずですよ。）

話がずれました。最後に、苗字関連サイトと言えば、全ての苗字が載っているわけではありませんが、以下のサイトが面白く、よく見えていますね。

全国の苗字（名字） 11万種

<http://www.2s.biglobe.ne.jp/~suzakihp/index40.html>

日本の苗字 7000傑

<http://www.myj7000.jp-biz.net/>

苗字（名字）の読み方辞典

<http://myoujiten.web.fc2.com/>

日本の苗字トップ100

【1】佐藤さとう【2】鈴木すずき【3】高橋たかはし【4】田中たなか【5】渡辺わたなべ【6】伊藤いとう【7】山本やまもと【8】中村なかむら【9】小林こぼやし【10】加藤かとう

【11】吉田よしだ【12】山田やまだ【13】佐々木ささき【14】山口やまぐち【15】斎藤さいとう【16】松本まつもと【17】井上いとう【18】木村きむら【19】林はやし【20】清水しみず

【21】山崎やまざき【22】森もり【23】阿部あべ【24】池田いけだ【25】橋本はしもと【26】山下やました【27】石川いしかわ【28】中島なかじま【29】前田まえだ【30】藤田ふじた

【31】小川おがわ【32】後藤ごとう【33】岡田おかだ【34】長谷川はせがわ【35】村上むらかみ【36】近藤こんどう【37】石井いしい【38】斉藤さいとう【39】坂本さかもと【40】遠藤えんどう

【41】青木あおき【42】藤井ふじい【43】西村にしむら【44】福田ふくだ【45】太田おおた【46】三浦みうら【47】岡本おかもと【48】松田まつだ【49】中川なかがわ【50】中野なかの

【51】原田はらだ【52】小野おの【53】藤原ふじわら【54】田村たむら【55】竹内たけうち【56】金子かねこ【57】和田わだ【58】

中山なかやま【59】石田いしだ【60】上田うえだ

【61】森田もりた【62】原はら【63】柴田しばた【64】酒井さかい【65】工藤くどう【66】横山よこやま【67】宮崎みやざき【68】宮本みやもと【69】内田うちだ【70】高木たかぎ

【71】安藤あんど【72】谷口たにぐち【73】大野おおの【74】丸山まるやま【75】今井いまい【76】高田たかだ【77】藤本ふじもと【78】武田たけだ【79】村田むらた【80】上野うえの

【81】杉山すぎやま【82】増田ますだ【83】菅原すがわら【84】平野ひらの【85】大塚おおつか【86】小島こじま【87】千葉ちば【88】久保くぼ【89】松井まつい【90】岩崎いわさき

【91】桜井さくらい【92】野口のぐち【93】松尾まつお【94】木下きのした【95】野村のむら【96】菊地きくち【97】佐野さの【98】大西おおにし【99】杉本すぎもと【100】新井あらい

※週刊ポスト二〇一四年一月十七日号

第二部 岡山県巫女特別協力資料（三）

『吉備巫女神道・ヤマト皇統相関係図』

・ 吉備の女系女子の王家とヤマトの男系男子の王家
（天皇家）との交錯の図示

旧吉備王国（郷里岡山県および兵庫県、広島県、山口
県など山陽地方）系巫女神道・巫女歌道 令和新時代
最終協力版

別添資料を見よ。